

# 第1章 戦場

東京での終戦

## 手渡された実弾「覚悟はできているか」

佐々木秀雄さんのお話から

○徴兵検査 兵隊にふさわしい性質や才能などを判定するために身体や身上を検査すること。

○守衛 警固すること。

また、その任に当たる人。

○近衛兵 明治五年（一八七二年）に設けられた天皇の警護兵。

○立哨 軍隊で兵士が一定の場所に立って監視に当たること。

○外套 防寒、防雨のため洋服の上に着る衣類。

昭和十八年（一九四三年）、二十歳だった私は徴兵検査を受け、昭和十九年四月一日付けで、皇居の守衛や天皇の警固につく近衛歩兵として入隊しました。入隊後は初年兵として、最初に旭川の部隊に寄留しました。この時、班長の靴がなくなるということがありました。管理が悪くという理由で初年兵が集められ、往復びんたをやらされました。まっすぐに立っているとすぐに倒れてしまいます。「足を半歩、横に開け。」といわれました。びーん、びーんと叩かれるのですが、歯を食いしばっていないと大変なことになるので、がまんしました。

この後、部隊は北見と釧路に移動しました。同年十二月一日付けで近衛兵として配属が決まったため、釧路から列車で東京に向かいました。東京行きを家族に連絡したのですが、電報が行き違ってしまい、列車が故郷の琴似駅を通過したときも親に会うことができずしてしまいました。東京に近づくと、空襲で被災したようすが列車の中からも見えてきました。「ああ、ひどいな。」と思いました。東京に到着したその晩から空襲がありました。

十二月から、東部第三部隊近衛歩兵第三連隊に配属になりました。近衛は伝染病をいちばん嫌います。このため一週間隔離されて宿泊し、毎日予防薬を注射されます。そして二十四時間安静にしていました。一回の勤務が四十八時間の二日間ですから、二晩寝ないでいました。一番つらかったのは、七十か所以上もある守衛につく場所を全部覚える必要があったことです。立哨のとき、右の方から何の建物か目をつぶっても言えるように、見えるものは全部頭の中に入れておくのです。勉強できる時間は限られているので、消灯後は外套を着て、電気について

○機銃掃射 機関銃などを敵をなぎ倒すように射撃すること。

○銀シャリ 白飯

○軍旗祭 旧陸軍の連隊で、その軍隊に軍旗を賜った記念日に行った祝典。

○芋飯 サトイモまたはサツマイモを入れて炊いた飯。

○コーリャン イネ科の一年草。中国東北部などで多く栽培されるモロコシの一種。

いるトイレで勉強をしていました。いつまでもトイレで勉強していると班長から「体でも悪いのか、どうしたんだ。」といやみをいわれましたが、勉強できる方法がこれしかなかったのです。歩哨として営門に立ったこともあります。飛行機が機銃掃射で撃つてくると、コンクリートが弾をはじいてくるのが見え、生きた心地がしませんでした。

そうしているうちに、日本は負けたも同然だという情報があちこちから入ってきました。兵士同士で堂々と話しているわけではないのですが、最初は一人一人に一丁あった銃がどこかに持っていかれて無くなり、竹やりが武器になってしまいうので自然に分かってくるのです。

そういうなかでも楽しみだったのは

食事です。部隊の食事は宮内省のものと同じものでした。ご飯も初年兵から銀シャリが出てくるのでびっくりしました。ときどき豚肉まで出るのです。

軍旗祭の後にはお酒や甘味品、たばこも出ることもありました。北海道の部隊にいたころの麦だけで炊いた飯や芋飯、コーリャンとはまったく違うものでした。

上官は初年兵に対してあまりどうこういいませんが、兵隊の一番高い位にいる内務准尉は特別でした。中隊長の



イメージ図

近衛兵として配属

手渡された実弾「覚悟はできているか」

○内務准尉 歩兵中隊の下士官以下の人事や給与を担当する役。

○中隊長 歩兵中隊長。将校のうち、大尉が当たる。

○将校 位が少尉以上の軍人。軍隊において、戦闘の指揮をする士官。少尉以上の武官。

○東京大空襲 約十万人が亡くなった昭和二十年（一九四五年）三月十日の空襲。空襲があつたのは、深夜〇時七分。冬は北西の季節風が強かつたため、火災が広がり、被害が大きくなった。

○鳩山邸 鳩山一郎氏の邸宅。政治家。犬養内閣、齊藤内閣の文相。第二次世界大戦後、日本自由党総裁となるが、公職追放される。解除後、日本民主党総裁として昭和二十九年（一九五四年）首

命令を伝達する勤務についている時です。私は将校が集まって一杯飲むところについていき酒を飲みました。ところがそのまま寝てしまったのです。それが内務准尉に伝わり、呼び出しを食らい、だいぶしぼられたこともありました。

昭和二十年（一九四五年）三月十日に東京大空襲に遭いました。このとき私は、延焼防止のために鳩山邸の木造の物置を壊しに行っていました。そこに、神田神保町が焼夷弾で空襲をうけているのですぐに戻れと緊急連絡が入りました。焼夷弾というのは、生ゴムの入った筒が中につめられていて、それが地上何百メートルかの上空で一本一本花火が散つたようにバラバラになり、落ちたところで火災が発生するのです。走って部隊まで帰る途中、焼けて真っ黒になった人や子どもをおぶつたまま焼け死んだ人をたくさん目にしました。あんなむごい姿は今まで見たことがありません。命がけでもどつた部隊の周辺は、一面焼け野原になっており、宮内省の一部もやられていました。そこで勤務していて戦死した初年兵も何人かいました。



イメージ図

空襲の焼け跡



相となる。日ソ国交回復を実現した。

○神田神保町 東京都千代田区の地名。もと神田区をなす。現在は、出版社や古本・新本の書店が集中する。

○玉音放送 天皇自身の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。

○宮城 天皇の住居。戦後、皇居と改められる。

○復員命令 兵役を解かれて帰省の許可が出ること。

終戦直前の八月十三日のことです。二重橋の正門やぐらに勤務していたところ、上官から実弾五発を手渡され、こう言われました。「佐々木、お前は今日死ぬんだぞ。覚悟はできているか。」「はい。」と私は返事をしました。これは若い将校たちが終戦に反対して、反乱を起こそうとしていたのです。結局は、手渡された実弾五発は使わずに終わりました。

そして八月十五日、玉音放送を聞いたときは、「やっぱり負けたのは残念だ。何のために今まで苦労してやってきたのか。」と思いました。今では笑われるかもしれませんが、当時はとにかく軍隊に行つて国に尽くすこと、戦争に行つて天皇陛下のために死ぬことしか考えていない時代だったのです。終戦のときは、宮城の広場に都民がずいぶん集まってきて、負けたくやしさがあつたのでしょうか、みんなひざまづいて泣いていました。

終戦後の八月末、中隊長から呼び出されました。皇宮衛士（今の皇宮警察）として残れといわれたのです。親がやっている農業を継がなくてはならないと伝えたところ、復員命令を出してもらうことができました。列車と貨物船を乗りついで、四、五日かけてやっと札幌に帰ってきました。夜中でしたが、琴似には親と妹が馬車で迎えに来てくれていました。家族と再会したときは、やはりほっとしました。

戦争で敵の攻撃を受けているときや焼け死んだ人を見たときは、戦争だけは絶対やるべきではない、戦争はあってはならないことだと実感しました。あんなむごい状況はもう二度と見たくありません。

DATA

平成21年度西区平和事業  
聴き取り

- ・平成21年10月5日
- ・西町まちづくりセンター



佐々木秀雄(ささき・ひでお)さん

- ・大正12年(1923年)生まれ
- ・札幌市西区在住

手渡された実弾「覚悟はできているか」